

日風



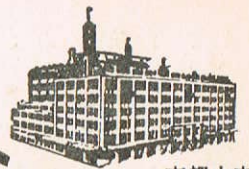
七月号

昭和三十七年七月十日印刷 第六卷 第四号 通卷 第三十二号
 昭和三十七年七月二十日発行 昭和三十七年七月号 毎月一回二十日発行

昭和三十七年七月十日印刷 第六卷 第四号 通卷 第三十二号
 昭和三十七年七月二十日発行 昭和三十七年七月号 毎月一回二十日発行

定価百円

お買物はまるぶつ



京都本店



丸物

京都駅前・電代37-2151



10 店に共通する商品券

京都本店・東京丸物・岐阜丸物
 新宿丸物・八幡丸物・豊橋丸物
 名古屋丸栄・浜松松菱・津松菱
 沼津松菱

タカラビール



京都 宝酒造株式会社



猿石の図 · 木下五郎画

目次

昭和三十七年七月号
第六卷 第四号

短歌	1
惠昭院のこと	柳井 道弘 6
ふるさと	清水 比庵 9
秋夜帖	高鳥 賢司 10
紙碑の心事	新田 興 12
「大東亜戦争殉難者辞世歌抄」 に寄す	13
表紙題字 カッパ	棟方 志功 (他)

短歌



家郷の地に勤めをかへて

栢木喜一

花も人も

西村公晴

しき島の大和の国とうたはれし名どころに立ち思ひはろけし
こもりくの初瀬も見ゆる磐余道歩みもとほりゐたりけるかも
ふるくに大和に生れし幸ひを身にしみにつつ思ふことあり
さわやかな風吹く街の初瀬寺牡丹の花を偲びつつるむ
新緑の眺めいかにと今年また初瀬のみ寺の舞台に立ちぬ
紅つつじ白つつじ咲く季節なり君がいぎなひ待つばかりなり
美しくひびききにるしみ声かなほのぼのとしておもかげたも
思はざる時に思はぬ電話きて思はぬ人の声をきくかな
文化勲章を与へられたとき、詩人晩翠は長子の遺志だとして
その勲章につく年金にて、五月の鯉のぼりを買ひ求め、世
界の国々に贈りその国の大空に翻がへさうと思ひをりしと
いふ
晩翠の季節きにけり鯉のぼり空に泳ぐをみてゐたりけり

うたた寝のさめてわが見る夕べの空くれなる淡く時ながくあ
り
うかうかと子に捕れたる一匹のてんと虫をわが掌にははず
やすらひの日々といはなくにいで来れば春うらうらと吾も行
く人
ゆくりなく春に来しかば銭だして御室のさくら見せてもらふ
も
甘酒茶屋に腰をおろせば絶えまなきゆききの人の春のあし音
花も人もあはれ春かなうきうきとただよふ時にこころ寂しく
時のうつり心のうつりあくこともなくてただ見る春のゆふ空
あなによしえ処女を吾子のつまどひて喜き日えらびて今日を
式挙ぐ
越 雪彦

夜な夜なに風を起せりと云ふ龍の眼に太き釘打てるもをかし

亀岡への車中



恵昭院のこと (一)

柳井道弘

恵昭院恒恒寿といふのが肥下恒夫氏の戒名です。氏は今年の早春梅花の節に世を過ぎられました。享年五十四歳。近鉄南大阪線松原駅の裏手にある陋屋で、三月二十日の夜、自害されたのです。

氏は明治四十二年五月三日、大阪府中河内郡瓜破村に生れ、のちに堺の肥下家を継がれました。生家の全田家は地下の旧家で、父君は直一、母堂はシヨウ、恵昭院はその次男でした。堺中学、大阪高等学校を経て、東京大学文学部美学科に進み、在学中保田与重郎、田中克己氏らと文芸冊子「コギト」を発刊し、編集発行人として昭和十九年に応召されるまで十数年にわたってこの仕事をつづげられたことは周知の通りです。

いまは大阪市に編入されてゐますが、瓜破のそのあたりは、日本でも一等早くからひらけた土地で、大和川浴ひの古代瓜破の大集落には、弥生前期から後期にわたるおびただしい土器を出土してゐます。なかでも大阪市立美術館が蔵する弥生中期の台つき鉢は、弥生式土器のうちでも最も完全に整った逸品の一つで、高雅でどこかつめたく鋭く、いまでは、生前それら郷土の出土品をひそかな誇りに

してゐられた氏の徳びぐきになってしまひました。

ぼくがはじめて恵昭院にお会ひしたのは、昭和十五年、東京中野区大和町のお宅でした。むかし沼であつたのを埋めたてたといふ低地の屋敷は、細い木立に囲まれて昼もひっそりしてゐました。玄関には鍵がかかつてゐて、呼鈴を押すと、小柄でどこかあどけないところのある婦人が扉の間から怖々と顔だけ出して用向きを誂られました。それが奥さんで、氏は東京大学在学中から、その美しい奥さんと二人きりで、冊子「コギト」の発行所でもあつた折衷家屋に、ひっそりとお過しになってゐたのです。その頃の氏が筆を執らず語らず、ただ「コギト」の編集発行だけを自分の務めとされてゐたことは、若いぼくらにはなにか立派なものに思へたものでした。

しかもその日、ぼくらに向けられた氏のいくらか皮肉な、それでゐてはにかんだやうな表情は、その後も消えたことはありません。

昭和十七年の晩夏、学徒兵として適齢より早く入隊することになつたぼくは、大和町のお宅にお別れの挨拶にうかがひました。洋風の玄関に立つて呼鈴を押すと、そと中から扉が開いて、まあ！と

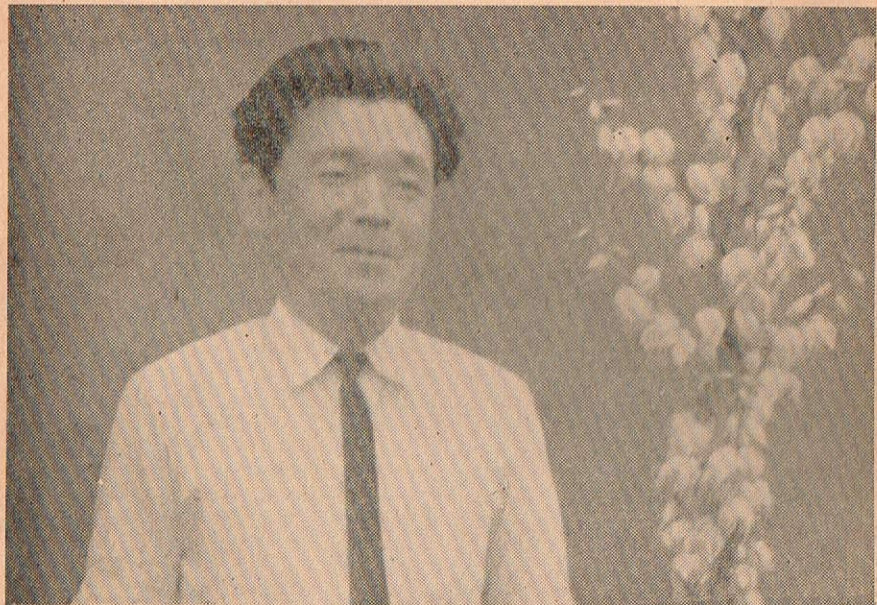
いふ奥さんの表情が笑みにこぼれて、「あなた、あなたヤナイさんですよ」と奥にゐる氏を呼ばれました。すると奥から貴公子のやうな気品のある氏が、静かにあらはれて、玄関脇の洋間に通されました。

ぼくは、郷里の部隊に入隊するために今夜離京しますのでお別れに参りましたと告げました。さうして日頃愛用してゐたパイプを氏に贈りました。そのパイプは当時ヘルビンにゐた義兄から贈られたものですが、兵隊に持ってゆくわけには参りませんし、日頃お世話になつてゐた氏に自分の遺品のつもりで贈つたのです。氏は、「さうですか」とおっしゃつたまま、そのパイプを手にして暫く黙つておいでになりました。そこへ奥さんが紅茶と洋菓子を運んでおいでになつたのです。

「ヤナイさんは今夜発たれるさうだ」と、氏は奥さんに向つておっしゃいました。

奥さんが、「まあ、それで御入營は何時ですの」とおっしゃいましたので、「十月一日です」とお答へしました。「お家でも待っていらしやるでせうね」としんみりした調子でおっしゃつたまましばらく沈黙がつづきました。ち——といふひぐらしの音があたりを木立から降ってきました。「マキノさんも御一緒ですか」と奥さんが顔を挙げておっしゃいました。「そうです。あいつは赤羽根の工兵隊なんです。この間二人で話して笑つたんですが、あいつは工兵だから橋やなんか架けるんですね。ときには橋桁を自分の肩に背負つて兵隊を渡したりするんです。

僕は歩兵だからその上を走つて行くんですよ。あいつは肩の上をいやといふほど踏んつけてね」さういふと奥さんは、まあ、と言つた。



故・肥下恒夫氏

たまたま子供のやうに声をあげて笑ひ出されました。しばらく話してゐるうちに陽は西へ傾きました。

氏はほくを阿佐ヶ谷の「ピノキオ」といふ小料理屋に案内して夕飯を馳走して下さいました。ピノキオといふのは佐藤春夫先生が名付け親だと聞きました。ささやかな感じのよい店でした。それからまう一度大和町のお宅に引き返してしばらく閑談し、いよいよ辞去する時「ちよっとお待ち下さい。お茶を入れますから」と奥さんがおっしゃいました。やがて運ばれた湯呑の蓋をとると、一片の桜花が湯気のたつ湯呑茶碗の中にパツとうす紅の花辨をひらいて浮いてゐました。ほくはふと「散華」といふ氏のレクエムを思ひ出しました。それはコギト同人の松下武雄氏にささげられた鎮魂歌でした。

散 華

散り落るる花の下に

鳥ら来り

悲しげに語るを聞けり。

ゆるやかな光りのなかに

童子らのむれ集り

山の辺をゆくを見たり。

ただひとときの雲の流れの

淨らかに身にふれて

しづかなる時のうつらひ。

雲の間の光りのうへに
人びとは歩み

華やかなる音ほびけり。

散り落るる木の葉の下に

人は来り、つねに

なほ美しきものを見たり。

その日、ほくの胸にまで映えた桜花の美しさはいまでも忘れられませんが、ほくはしばらくそれをながめてから静かに飲み乾しました。

その夜、氏は東京駅まで見送って下さいました。荷物はすでに郷里の方へ送ってゐましたので、身軽なほくは氏と一緒にそのまま省線で東京駅に出たのでした。発車までには一時間以上もありましたので、どちらから誘ったともなく二人は皇居前広場へ歩いてゐました。夕闇のしだいに深まった広場は閑静で人影もありません。お濠の柳蔭やさびのついた石垣、参差と枝を交へてさがった老松、その影を黒々と映すお濠の水、鬱蒼とした大内山の森、これらの景物が夕闇のなかからありありと浮き上ってほくの胸に迫りました。

二人は玉砂利を踏んで、深い濠をへだてて二重橋に対する濠端の柵に近づき、長々と枝を差しのべた松樹の下に立ちました。

それから皇居の方に向かって深々と頭を垂れ、しばらく黙禱をささげました。頭をあげると大内山はいかにも深沈としづまり返って、なにかしら幽邃の気がただよってゐます。あるひは生きてふたたびこの玉砂利を踏むことはないかも知れないと、ほくは玉砂利を一つ

ひろって掌の中であたためそつと懐中にしました。氏はそれを黙って見ておいでになりました。

いよいよ汽車に乗る間際に、氏は銀の象嵌のある矢立をほくに下さいました。いつか、銀座の古道具屋で見つけたのだら、さう言つて氏は静かに笑つておいででした。ほくにはその古風な贈物がなによりもありがたく、征旅の便りをこれでしたためますと、そんなことを告げて氏の微笑に応へてゐました。

かうしてほくは、暗い夜の首都を後にしたのでした。

それから三年後の昭和十九年の初夏、ほくは西南太平洋の某島に転属派遣を命ぜられ、その休暇を利用して、かねてきめてゐた結婚の日取をくりあげて式を挙げました。氏はそのお祝ひに芭蕉図録一巻を贈つて下さつてゐました。ほくは、あはただしい休暇の祝婚のさわめきをよそに、その図録を半日眺め暮らしたものでした。やが

て、その年の暮には、氏もまた奥さんをひとり残して出征されたのです。

翌昭和二十年の仲秋、無事復員したほくは、翌々二十一年の初冬、氏を河内松原に訪ねました。氏は復員帰郷後ずつと百姓に専念されてゐたのです。土地不案内のほくは当時大阪の帝塚山に住んでゐた庄野潤三君に案内して貰つて松原市上田に氏を訪ねました。

その頃氏は豆腐屋の二階に奥さんと二人で間借をしておいでになりました。互ひに生きてふたたび会ふことなど予期しなかつた再会でしたが、氏は淡々として例の皮肉なそれであるにはかんだやうな微笑を浮べておいでになりました。氏の内なる厳しきは、一種のをかしみを氏自身に課して居られたのかも知れません。そして、その日氏はなほ毅然として、日常の卑近をかくし、世上の修羅にはにかんで居られました。

(未完)



ふるるやう

奉獻このはななくやひめ神社二首

美しき古き尊き神さまときこえまつりてありがたきかも

天地のはじめの国のおん母と高く貴くうつくしき神さま
朝日さす丘の上より見渡せばわがふる里もうつくしきかも

この見ゆるむかひの山に竹藪あり松林あり家あり寺あり

清水比庵

山川の清きながれのをちここにどこかに鳴きて止むかじ
かかも

にはか雨烈しく降りて止みたれば何ごともなく人の歩く

われらしくものの散らばり青き灯が之をてらしてをるひ
と間なり



紙碑の心事

雲 処 新 田 興

公晴君雅兄、玉札敬領。吟詩恰似鍊仙骨、

骨裏無詩莫浪吟。とは唐の許渾が句、而て詩

は即ち歌也。僕幼時父祖より紀記の話を聞か

され、尋いで詩経や楚辭の話を聞かされ、長

ずるに及び自ら「詩」と「礼」とを読んだ者

で、素人ながら君の歌が少しく解り、新人寄

贈集中、唯だ君の「花降」のみが残されて居

る。お手紙に由れば這般戦争殉難者の歌抄を

編して紙碑に充てんとするに因り、拙老が一

言を望むとの事、心ある哉々々々。国を誤

りし重大責任は別な人が別な所で問はるべき

筈。抑も殉難者の心事は即ち楠公湊川の心

事。紙碑の心事は即ち義公建碑の心事。何ぞ

肅然整襟の至に堪へんや。僕再建明治神宮を

拝するの詩あり、未だ曾て人に示さず、茲に

数首を抄録し聊か君が盛意に答へむ。

(一) 三門殿トシテ旧ノ如ク、佳氣マス、(一) 鶴

鶴。皇統神武を承ケ、中興礼文ヲ布ク。聖

図天下広大、宗祀日ニ澄芬。廟貌新クニ煌

赫、鬱葱紫雲を捲ク。(原五言律詩・文韻)

(二) 禱府廟主ニ疲レ、天民太和ヲ仰グ。指揮

率士ヲ安ンジ、政教盤陀ヲ撫ス。白馬威靈

遠ク、玉衣愁夢多シ。徹臣新廟ニ哭シ壯士

悲歌ヲ発ス、中興曾テ幾許ノ流恨山河ニ滿

ツ。(原五言排律・歌韻)

(三) 大日本国ハ是レ神国。万古君臣日星ノ如

シ。何事ゾ今ニ至リテ異習ニ化ス。在三ノ

節地ニ委シテ零ツ。王者迹熄ムハ臣子ノ責

誰レカ彝倫ヲ明カニシテ典刑ヲ正サム。嗚

呼礼楽典章ハ天子ヨクテ。春秋ノ学須ク丁

寧ナルベシ。(原七言古詩・青韻)

(四) 大日本国神是レ君。烈祖万幾最モ勞動。

億兆心ヲ同ジク忠ト奉。政教雅和水ヘニ

斤々。一タビ鳥号大帝ヲ哭シテヨリ。復ク

神武聖氣ヲ仰グ無シ。誰レカ知ラムヤ代々

木原頭森林ノ裏。靈象彷彿五雲ヲ捲ク。(一)

万自重。老興壬寅六月九夜

原七言古詩・文韻)

最後に近作一首を附せむ、其序に曰く、今人

口を閉けば人類愛と云ひ、民主々義と云ひ、

世界平和と云ふ、嗚呼孰れか是れ蕉鹿の夢に

あらざるを知らむや、乃ち謳ひて曰く、

世界平和夢ニ入ルノ時。善謀何レカ是レ安

危ヲ決セム。園陵神木長ヘニ煙霧。此ノ意

今人知ルヤ、知ラズヤ。(原七言絶句・文韻)

今や日本民族は上下を挙げ、伝統喪失、歴史

遺棄、唯だ所得倍増と、訳の解らぬ片仮名の御

外国語にのみ血道を揚げ、天子を芸能人の御

本尊に仕立てまつらんとするの時、漢字漢語

漢詩漢文などは鼻つまみ、嘸する者も無かる

べし、故に必ず此詩を印刷に附する勿れ、パ

ルプを妄費する勿れ。唯だ君が歌、老が心に

当るものあり、強いて洩せる愚痴に過ぎざる

のみ、何々。僕己老矣。兄富春秋。為道惟千



『大東亞戦争殉難者辞世歌抄』に寄す

保田与重郎

戦後十数年、この書こそ最も意義ある出版

と存じました。嗚咽慟哭といふものを与へる

唯一のもの、——兄がこれを作らんとし作ら

ねばならぬとしたころ十分わかりました。

又これのみで十分な出来です。重大なことは

これが流布です。千万の理論や運動より、こ

の書物一小冊子の流布重大です。冊子、小さ

いこと却って意味深く力つよく人をうつでせ

う。あなたは最も大事な仕事をよくなし上げ

ました。

清水 比庵

「辞世歌抄」ありがたく存じました。実に

凄惨、卒読に堪へず。

友人が黒ばらを切ってもって来てくれました

た。実によい色で深い秘密な色であります。

小生は戦争辞世歌を読んでたまらなくなり、このばらの花にしばらく見入りました。不思議な黒い色です。戦争が起らないやうに考へる色です、深い色です。

いくさして死ぬとき詠みし歌悲し
あゝ黒ばらの花の悲しも

詫間 力平

「辞世歌抄」このところ繰返し拝誦させて

いたゞいて居ります。最近あるグループの御

婦人の方々が次々とこれを筆写されて居りま

す。誰彼にかゝはらずよく味ってもらへば感

動せしめずにはおかぬと存じます。作歌など

特別に手がけていなかた人が大部分と存じ

ますが、これだけに歌ひ上げられるとは、そ

こにぎりぎりの時に自ら出た研ぎすまされた

感激であったからでないでせうか。このやう

なことが日本人の誰にも出来るといふことは

日本人の心の深淵に何か尊いものがあると考へられ、日本人の誇りでもあると存じます。

(中略) 自己の人生も信念も、大君に帰命し

たてまつるといふ点に己が所以を置き、具体

的には武士道に則して自を処さんの心情が切

々と現はれて居ります。而も親を想ふの至情

が流れ、この精神こそ将来日本人の魂をふる

ひ起させる火種ともなり、更にまた人類理想

達成に寄与し得る因縁ともなると確信致しま

す。(中略)

私の長兄猪口敏平(武威艦長、比島沖海戦

の前日シブヤン海で艦沈没の際生きながら艦

と運命を共にしました。海軍中将、四七歳)

の常に口にした自詠作は

愚かなる身にむちうちて励みなば

神もめぐみを垂れたまふらん

で御座居ました。御参考に申し上げます。重ね

て御労作深謝申し上げます。(後略)

高久彦太郎

(前略) かような性質の御壮筆は終戦後始めて世に発表をみたものと存じます。本辞世集は、全国にその例をみないものだけに、必ずや後世に伝はるものと確信して疑ひません(中略) 一人で拝見するのは勿体なく、心ある人々にも回覧せしめて居ります。私折をみて筆写させ、数多くの人々に贈り、大精神の啓蒙運動にさせて頂いたら(特に今の青年諸君のため) 大効果あるものと確信して居ります。(後略)

松尾 忠風

辞世歌抄全く感激致しました。不肖二男のもの一首、永い間大切に仏壇の中に先祖の靈の下に保存致して参りましたが、先づ入隊の際、机の奥にしまつてあつたものを死後見つけ出したものです。例言第三項浪ながらに拝読致しました。(中略) 私の記憶を書いたのが誤つてゐまして申訳ないことを致しました。三句目、筆置きて(註、十五頁)でした。十八歳です。(後略)

千浦 節

東京の宿で落筆さそく拝読致しました。新宿の雑踏のなかで姪を待ちあはせるあひだも惜しんで読みふけりました。都会の騒音もみ霊の聖なる息吹きに吹きはらはれて、しんしんたる鎮魂の深淵に身を埋没してしまひました。

石井 寿夫

志深い貴家によって選ばれたことも大きく、ひびきを添へたのでありませうが、すべてのみ歌に一貫する烈々たる国を想ふ折りと、民族のいのちに合一し伝統の流れにとけこんだ歌の調べとが、清くさやかに、しかも力雄々しくわが魂に迫ります。今さらの如く、大東亜戦争に燃えあがった民族のいのちの深さと重さを畏こみませう。

わたくしも同じ頃には、歌才なき身で、ものけにとりつかれたやうに歌を詠んだことを思ひ出しました。今では歌心がすっかり冷却して創作の道に親しむことのないものと思ひあはせて不思議の感にうたれます。当時は、民族のいのちが天地の永遠さと広大さをもって、焔と燃えてゐたに違ひありません。「辞世歌抄」をひもどくことによって

徹郎の分(註、三十六頁、日附十七日が正当)も御収録被下有難、一家相伝の記念帖と相成りましたことを感謝致します。殉難諸士の句々肺腑を抉る、涙なくしては卒読致されぬもの、孤室單座、往事を偲び今次に及び万感無量です。

弓野 弘

(前略) 早速亡弟(註、三頁)の靈前に供へさせて頂いたことでした。(中略) 維新殉難の志士先人の詩歌に接した時と同様に強い感銘と共に涙して誦誦した次第です。まことに今の世の所謂歌よみの作品と稱するものと対比する時に、歌の巧拙は片々たる末稍事にして、歌以前の志が怒涛の激しさを以て胸を打って迫ります。

今後神道教化の際の講話等に貴重な資料として活用させていたゞき度いと存じて居ります。(後略)

難波江通泰

(前略) 全篇これ悲涙、今日まで余命を保ち断腸の思に御座候。若き人々に頒ち切確仕り度存じ居り候。(後略)

いささかでも、この生命の巨炬をよみ返らせたいものです。(後略)

水代 勲

「辞世歌抄」一氣に読ませていただき、誠に。顔前にみ霊かへられて鎮まられる如く、自然と哭泣を感じました。まして、み霊に対し誦誦する俗論には悲憤慷慨いよく、高まりあゝ悲哉々々。されど神州男子何ぞ悲しみに倒れん。吾等歴史を学ぶ学徒として責任の重かつ大なるを痛感します。(中略)

今村 均

本当によき御創意にて、大きく意義ある御企てによる歌抄、君国に殉じた人々の、逝く時は何等の雑念はなく、唯真心を表現する純情を拝読し、涙を覚えました。邪念雑念の生じた時には、いつもこの歌抄により、わが心を叱るつもりにしてをります。

清水 文雄

乍略儀、衷心よりの御礼辞申上げます。

幡掛 正浩

(前略) 少し頁をめぐったばかりですが、感涙しきりに催し激情制止しがたいものを感じます。学兄の労を多とし、本書が一人でも多くの囑目を得て、継承の列を興起せしむることを祈念して止みませぬ。

青山新太郎

特別攻撃隊をおもふ

神としも讃へむほかの言葉なし聖きかぎり捧げたまへる

十有七また十八の若きらよ必殺の火玉となりてゆきしか

秋空の錦雲にも涙わくゆきてかへらぬ若きらおもへば

日本の未来を照すみ光と仰ぎまつらむ神風特攻隊

影山銀四郎

「辞世歌抄」有難く、これは貴重な歌集です。感銘深く拝見してをります。来月初旬に出る歌誌「白木箱」に紹介し、合せて貴兄のご努力に敬意を表しました。尊攘義軍の茂呂氏も知つてゐますし、那須弓雄少将も栃木県

「辞世歌抄」ありがたく頂きました。空虚で高い声ばかりが横行してゐる今日、ともすれば忘れられがちな、かつての国難の日の、低く静かにつぶやかれたこれら真実の声をこのやうな形に集めていたゞいたこと、唯々感謝です。その後も資料若干手許に集つてゐますので、第二次刊行に加へていたゞきたいと思ひます。

田中 克巳

「辞世歌抄」ありがたく存じました。御苦心の甲斐あり、鬱屈の魂展げゆくものあるかに存じます。小生漸く老境に入りましたので一生懸命にやりをります。言葉には尽し得ぬものあり乍らお礼のみ申上げます。

中河 与一

「辞世歌抄」深謝に堪へません。巻頭の御文章により深き御志知り感謝申上げ候。永く机辺に供へたく、なほ多くのかかれた歌もあるべく、一層の御丹念御祈り申上げ候。

安延多計夫

(前略) 父祖の実践した道を行ひ、国難に

殉じた方々の真意を知ることこそ、所得倍増よりも今日の日本に必要なこと、愚考いたして居ります。この見地に於きまして貴書は有難いもので、多くの人々に読まれることを切望いたします。

拙著『南溟の果てに』御参考になりましたよし、今後とも御友情を賜らんことを願ひ申上げます。御加餐を祈ります。

高木 俊朗

(前略) 貴編歌抄中の鷲尾少尉は、私、最後の数日を起居を共にし、日記を托されました。そのなかに「告げもせで」の歌がありました。同少尉をはじめ、同日出撃した振武隊のことはいづれ「真紅の飛行雲」(註、大阪日日新聞連載中)に書きます。(後略)

中村 武彦

(前略) 「辞世歌抄」立派に出来上り御恵送いたゞき有難うございました。ところが、逸早く拙宅へ訪ねて来た若い連中の一団が、持去った何冊かの本の中に、このいたゞいたばかりの歌集も入ってをり、彼らが回覧することは無駄でないので怒りも出来ませんが、

小生専有の一冊がないことは甚だ不便且つ寂寥を覚えます。(後略)

小杉 放庵

辞世歌抄まことに仰せの如く顕彰紙碑ですな。三、四頁を誦誦して心いたみ、つゞけられませぬ。だんだんよんで行きます(中略)御特志の編輯を珍重致します。三分の一ほどよみました。書架におきて時々よむ事です。人にも読ませませう。

平泉 澄

拜啓、いよいよ御清安何よりです。此度は「辞世歌抄」御発刊相成り、御苦心御集成の事あつく御礼申上げます。(中略)阿南惟成中尉の残されたよい歌が一首抜けてゐるかと思ひます。しらべて分り次第御しらせしませう。(後略)

小山 寛二

拜復、益々御清祥御活動の段大慶奉ります。「辞世歌抄」忝く拝受、まことに有意義のお仕事と感服奉ります。よく熟読させて戴きました上で、感想をのべさせて戴きます。先日豊橋にて保田大兄と数日を共に致しました。不致御礼言上迄。合掌不一。

五月 歌会

五月歌会は身余室で行ふ。同日は、上田恒次氏窯々参観の為、歌会を先生御評評のみにて切上げ直に洛北木野に向ふ。皿山の斜面に築かれた登り窯から取出される白瓷練上等数々の盤皿などに自づから魂太り行くを覚え、それ／＼望みのものを運ぶ。終つて上田氏心尽しの御馳走に預り保田先生御夫妻を中心に明るい清夜を過した事であった。

詠草次の通り。他に奥明幸、足立一夫出席。
ゆるやかに起伏のつづき山裾もわが居るこ
こも花さかりなり 緒方三和代
夜の雨に若葉生々と美しく濡れてふしぎの
いのち溢れたり 西村 公晴
春せみのなきしきりゐる鳴滝の赤松多きみ
ささきの道 緒方 親
さつきかぜさしきまへばこのまのどう
あんのしようきしこふむらしも 柳井道弘
筆洗ひ心正してよみまつる神さびませし山
陵の歌 小原春太郎
長脚下登りめぐりて今年また初瀬のみ寺の
舞台に立ちぬ 栢木 喜一
花ぐもと誰か云ひしかも家のある山をうづ
めし花さかりかな 村上 益夫

編集後記

此の処各地より、梅雨末期の豪雨による被害がしきりに伝へられてゐますが諸足跡には如何御過しでせうか。
扱本号には、先に刊行された西村公晴編「大東亜戦争殉難者辞世歌抄」に対し、編者に寄せられた諸家の感想を特集の形として掲載致しました。

此の歌集は、先に編者が本誌上に発表しました「一族の歌資料蒐集についてお願ひ」に現在までに寄せられた資料の一部を整理編輯したものであり、更に此れが完成を推進せしめる為に刊行された次第です。

思へば本書の刊行については、今は亡き人々への追慕の情と菩提を弔ふために編者を始め、関係者一同のあゝき志のこもった顕彰歌碑と申すべきであり、誠に意義深いものがあります。

然し、海員、学徒、勤労働員、赤十字関係等全殉難者から見れば、末だ九牛の一毛と思はれます。又聞く所によれば、一般戦没者などの資料もすでに出版物による蒐集はあらかた尽され、今後は遺族など有縁の人々によって保存されてゐるものにはしか頼る他なき由で

六月 歌会

六月歌会は十七日青葉薫る身余堂にて開かれた。例に従つて歌会終了後、兼て御願ひしてあった梅尾高山寺住職小川義章師より妙恵上人と歌に関する御講話をきく。夕刻会後、更に有志のみ奥様心尽しの御料理を頂きつつ小川師が五高、東大教授時代の回想談を主として歓談の数刻を過す。詠草次の通り。

美しくバラの花散るつゆ荒れのすぎしあ
したのわが吐息かな 吉田 敏子
かぎるひのうら、春日をひっそりと薄茶
すすりてわがはべりをり、ちちはなはる
かの白瓷このわり上げもまたよしと思ひ
とまどふ窯びらきかな 緒方 親
春屋のしじまをやぶりほととぎす時しく
になく身余堂かな 小原春太郎
つゆ晴れの朝戸あくればはればれとさし
込むひかり幾日ぶりかも 西村 公晴
雲一つ浮ばぬ空の青きかな木野皿山の窯
びらきかも 緒方三和代
大麦のけら色づきぬそばの田に早稲の田
植ゑるひとは夫婦か 村上 益夫
岩倉の木野の皿山さらさら忘れはすま
じよき家構へ 栢木 喜一

あります。

つきましては本発願成就のため会員諸兄姉に於かれても資料の所在などにつき、編者又は風日社宛御知らせ願ふ等、更に一層の御尽力を仰ぐ次第です。

なほ来る八月は先号に御知らせの如く四日・五日には福井県永平寺で恒例の夏季歌会が行はれます。又七日は昨年弥山で急逝された三村行雄氏の命日にあたり地元和歌山市では此の日から遺作展が開かれ前夜には追憶の会も行はれます。少し強行日程とは思ひますが中、下旬に大阪京都に於て開催される越雪彦氏個展と共に、いづれにもぜひとも出席参観致したいと存じます。(親記)

× × ×

昭和三十七年七月二十日発行
主 幹 小 原 春 太 郎
編 集 人 緒 方 親
発 行 所 風 日 社
京 都 市 中 京 区 西 ノ 京 馬 代 町 五
電 話 本 番 〇 七 五 六 九 番

田風

七四



寺林

十一月

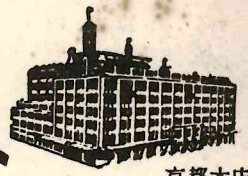
昭和三十一年十一月二十日印刷
昭和三十一年十一月二十日発行

第六卷 第二十五号
每月一回 二十日発行

通卷第三十三号

定価百円

お買物はまるぶつ



京都本店



丸物

京都駅前・電代37-2151



10店に共通する商品券

京都本店・東京丸物・岐阜丸物
新宿丸物・八幡丸物・豊橋丸物
名古屋丸栄・浜松松菱・津松菱
沼津松菱

タカラビール



京都 宝酒造株式会社



猿石の図 木下五郎画

目次

昭和三十七年十一月号
第六卷 第五号

短歌……………1

恵昭院のこと(二)……柳井 道弘 8

森口奈良吉翁
米寿を祝して……………10

弔 柳田国男翁……………原 真弓 11

笠岡にて……………清水 比庵 11

風日、桃合同永平寺
夏季全国歌会記……………木ノ下白鷗子 12

昔原歌合せの記……………緒方 親 15

表紙題字……………棟方 志功
カッタ……………(他)

短歌



あしたゆふべ時なくつるわが思ひいかにせよとか人のいふらむ
栢木 喜一

ただ一途今ひとたびのあひを待つ心と知るや燃えつつもなかりそめの行きあひびとといひひて心のうちは燃えぬ炎とこの山の向ふに住むと思ほえば山も裂けよと叫ばまほしく送らざるいひわけしつつながめぬしまなきしあつくまなうらさらず

うなづける人を門べに放ちやりかなしき別れしてしまひけりけふはつといだしくれにし葛餅のその葛の香を思ひるにけりあゝわれは君来と呼びて今日もまた東の空を仰ぎるしかな心さへ通ひをればと人はいへど燃ゆる思ひのたへぬものから美しく思ひきたりしいやはてのこのわが心つたへざらめやこれでよしこれよしとはたへるつつ心の駒のあはれかゝるか

行く水の過ぎにし人ときびしみぬ君が便りを読みかへしつ

大東亜戦争殉難者辞世歌抄
を頂いて、その日に

吉村 正

子等にのこすたふときものひとつなる散華抄ここに吾にとどきぬ

さきの代のいくさと愛と死のこのかゝる證よかなしき祕帖ながらへしそのかなしみのごとくにもなみだあふれてやまざりしかな

老人のつらに入りしやとりわきてけふかきくるゝわが涙かなひとらみな若くはかなく美しき散華抄ここにはにのこれりわが若き日に見えしことのだゞ一度むさしのの夏わすらえなく

あゝ蓮田善明先生

金 功 千

憂鬱のこれの事務かな眉あげて漢撃山眺むれば悲しみの瀕く



恵昭院のこと (二)

柳井道弘

恵昭院は南朝鮮で終戦を迎へられたといふことでした。しかし、その日のかなしみともいきどほりともいひやうのないなきを、口にはされませんでした。その日、深刻に耐へ難かつた沈痛のはてに氏が何を見られたか、ぼくは暗黙のうちにはぼ了解してゐました。氏は農耕の生活のなかにある永遠の信を、みづからの胸にひそかに点じてゐられたのです。

われわれの神話では、神の道は生きた神々の生活として現はされてゐます。そして神々の生活は米づくりがもとになってゐます。祭祀も日常も、それがそのまま永遠につながる原理を、日本の古代の道は、具体的に伝へてゐます。生命存続の原因である米づくりの周期を「とし」と考へ、この年の循環を永遠なものの根拠と考へたのです。

さきにもしりましたやうに、恵昭院の生家は、日本でも一等早くから開けた大和川沿ひの瓜破村で代々農耕を営んでこられた旧家です。また、養家先の肥下家も河内松原に田畑を持つ地主でした。だから南鮮から帰還された氏が、旧縁をたよって前記の豆腐屋の二階に間借りをされ、いち早く営農の準備をすめられたことは、

かへされてゐることに、神聖な自負とひそかな誇りをあらたにされたにちがひありません。神聖で正しく美しいものは、生活として米軍占領下の日本に敵として在ったのです。氏はその生活に全身心を投じられました。

豆腐屋の二階で、自分の農耕生活を語られる氏は、いかにも幸福さうでした。

「ぼくの田んぼを見て貰はふかな」

帰るといふ庄野君を駅に送ってから、ふたりは稲田を見にゆきました。河内野の豊かな野面を夕べの涼風が渡ってゆきます。ぼくが当時郷里で百姓をしてゐたせいもあって、氏は品種や肥料や、その他稲作の模様など、例のはにかんだやうな、それでゐる多少皮肉な口調で咄々と語られるのです。それからふたりは、河内野のはて澄んだ初秋の夕べの空の下に、二上や葛城、金剛の峰々を望みました。

「あれが金剛山ですか」

「さうです。正成はあの麓にゐましたんやな」

しばらくふたりは無言で、山霊のたすまひに付きあつてゐました。その後、自分が南河内に移り住むやうになるとは夢にも思はず、ぼくは、金剛や二上をわが眼中に収め得たことに万感無量の感慨を覚えたことでした。

二度目に、松原を訪ねたのは、昭和二十四年の早春の頃でありました。保田先生の奥さんの実家が、やはり中河内の柏原にあって、丁度そこへ行って居られた保田先生を訪ねた帰途、つれだつて大和川を越え、松原に氏を訪ねたのでした。当時氏は、納屋つきの簡素な家を新築してそこに住まうておいででした。田んぼを背にしたそ

ごく自然な成りゆきでした。しかし、それはただ当座の生活の手段といふだけでなく、ただそれだけが、農耕生活だけが氏の戦後に残されたただ一つの処世だつたやうに思はれます。

一方では、農地改革やモラトリアムなど占領政策による政治経済上の改変がつづき、それらの施策が、日本人の精神構造を徐々に崩壊させ歪めてゐました。そのとき氏の心は、厄介な小作問題や間借り生活の不自由のなかで、何千年来父祖が耕してきた郷土の田畑にただ一途にむすばれてゐたのでした。それは、地主としての郷愁や食糧獲得のための手段としてではなく、遠い先祖からうけついできた国と民の倫理の道で守り伝えることだつたのです。

松原にある柴籬神社は、反正天皇の丹比柴籬の宮跡といはれます。国は破れ、皇居は炎上し、飢餓や犯罪やむきだし欲望が焼跡に燃えくすぼつてゐた日に、氏はいくたびか、まばらな杉木立に囲まれた寂しい古代の宮跡に足を運んで、「是の時に当りて、風雨時に順ひて、五穀成熟、人民富饒ひて天下大平なり」と、反正天皇紀にしろされた古代の大御代を回想されたこととせう。そして、もっとも単純な素朴な精神の幸福と理想が、その日のままにいまもくり

の平家は、いかにも新開都市に取り残された農家の趣を当時からもつてゐました。氏はこれで一人前の百姓になつたのだといふ喜びを隠さうとはなさいませんでした。四畳半二間きりの居室はきちんと整理されてゐて、組み立て式の書架にはぎっしりと本が揃んでゐました。

三人とも百姓をしてゐましたので、その夜は、農耕の話が多く、尊徳翁や宮崎安貞の話なども出てゐました。ぼくの郷里が和牛の産地だといふことから、昔、美作から牛をつれて農事の出かせぎに、大和の方まで、牛がきてゐたといふ話も出ました。なんでも播州あたりまで迎へにゆき、帰りはまた送つて行つたといふことで、いかにものどかで、心あたたまる話に皆で興がり、それぢや、牛をつれて田作りの手伝ひに來ませうか、などと笑ひ合つたものでした。

それから二十九年の初冬まで、恵昭院にお目にかかつてゐません。その間、二十六年十一月には農耕のよき相談相手であられた父君が逝去され、二十七八年頃には水田の一部で煩雑な菊造りを始められ、二十八年の暮には、伝手を求めて堺の脳病院に奉職なさるなど、五反百姓としての生活に孜々として打ちこんでゐられたのでした。

二十九年の五月から、大阪市内の教科書出版会社に勤めるやうになつてゐたぼくは、一人で会社の寮に住んでゐたのですが、仕事が忙しく、仕事の合間には郷里の妻子のもとに帰つてゐましたので、仲々お訪ねできずにあつた。

そして、晩秋初冬のある日、その年刊行した第二詩集を持ってやつと松原のお宅をお訪ねしたのでした。

日風

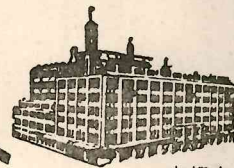


号。月。一

昭和三十八年一月十日印刷
 昭和三十八年一月二十日発行
 昭和三十八年一月二十日発行
 昭和三十八年一月二十日発行
 第七卷 第一号
 第七卷 第一号
 第七卷 第一号
 第七卷 第一号
 通卷 第三十五号
 通卷 第三十五号
 通卷 第三十五号
 通卷 第三十五号

定価 百円

お買物はまるぶつへ



京都本店



丸物

京都駅前・電代37-2151



10店に共通する商品券

京都本店・東京丸物・岐阜丸物
 新宿丸物・八幡丸物・豊橋丸物
 名古屋丸物・浜松松菱・津松菱
 沼津松菱

タカラビール



京都 宝酒造株式会社



猿石の図・木下五郎画

目次

昭和三十七年十二月号
第七卷第一号

短歌……………1

益良雄ぶり(十)……武井 大助 9

夏すぎて……………清水 比庵 11

恵昭院のこと(三)……柳井 道弘 12

国宝三種……………原 真弓 14

前号の歌より……………緒方 親 15

表紙題字
カット……………棟方・志功
(他)

短歌



栢木喜一

随縁抄

西村公晴

さる十月六日、三浦義一、尾崎士郎、影山正治、長谷川幸男、清水威雄の五氏を迎へて国技発祥の地穴師大兵主神社にて日本相撲協会幕内力士一行の正式参拝の祭典を挙行せり。前後二夜三日五氏に同行して大和路東道の役を果す、すなはち詠める歌若干

三村行雄さん追悼会に出席して

多武峯いでて坂路を降りゆく車窓にうつる峽の杉の穂
談山を下る車窓に見つたる山田の畦の彼岸花かな

紀の国にはじめて来れどこの海山讃へし君のありといはな
くに
うら悲しく来つるものかな海山のながめはあれど君はいま
す

たわわなる蜜柑の山に人は群れ日本晴れの土俵入かな
まのあたり幕内力士仰ぎみて涙こぼるといひし老人
穴師川いづこ流ると思ひつつ木犀匂ふ野辺を行きけり
木犀の匂ふ穴師の村をすぎ三輪の社に詣でけるかな

浜木綿は咲きつつあれど絵筆とる君いままさと思ひなげかふ
海山のあはれながめよ歌に絵にきみが留めしころの眺め

尾崎士郎夫人

藤白神社より有馬皇子のお墓に詣づ

末の子の中学生に見せたとくりかへします山の辺の道
石舞台に杖つき立ちてしばらくを仰ぎいまし「悲天」うたびと

みくまの第一の鳥居くぐりしが御幸の道はなほはるかなり
おどろきて坂の登りにあふぎ見し大楠の下に汗ぬぐひ佇つ
代々をへて椿地蔵の名をとどむ皇子が悲しき奥津城どころ
ますらをの生命かなしゑ常なしとなげきおもへば吾も現身



恵昭院のこと (三)

柳井道弘

その日は、冬ざれの風の寒い日でした。会社のある津守界隈の、獸皮を加工する異様な匂ひを、木枯がひきちぎり吹きとばし、燒跡の草茫々の一角にある鮮人部落も妙にひっそりとしてゐました。午後になって、会社の寮を出たばかりは、数年前に庄野君につれられてきた記憶をたどりながら、松原のお宅を訪ねたのです。

駅の裏手にあるお宅は、どんよりとした寒空の下に深閑としてゐて、人の気配さへありません。風に吹き曝されて乾いた庭を横過って軒下に立つと、肥下恒夫、保出与重郎と、二つの門標が仲好くならんでゐて、思はず微笑がうかび、胸に灯のともるのを感じました。あとで聞いたのですが、保出師は、お子さんの高校進学の便宜のために氏の家に寄留して居られた由でした。その、無難作な門標にさへ、あの「コギト」十年の營為が偲ばれて、胸が熱くなるのを覚えました。

恵昭院は昼寝をして居られた様でした。しばらく戸口で待ってゐますと、にこにこ顔を綻ばせた氏が顔を出され、やがて座敷に招けられました。

「ぼくも、心配したときがあったんですが、肥下さんがあんなにやるから、もう安心ですなあ」

「大丈夫です。ひきうけます。誰かが不安はありませんよ」

「ときどき、御馳走をねだりに行きますよ」

「まあ」

「出入りの八百屋に、天野屋利兵衛の子孫がゐるましてなあ、おもしろい男ですわ」

「へえ、あの忠臣蔵の天野屋ですか」

「さうよ、天野屋利兵衛は男でござる、といふんでせう」

「おい、写真があったやないか。あれを出してみ」
奥さんが持ち出された、職場でのいろいろな写真の説明なさりながら、氏は例のはにかんだやうな微笑を浮べておいででした。背広姿のいかにも実直さうな天野屋が白衣にゴム長の氏と楽しさうに竝んでゐる写真もありました。そのどれにも、庶民にまみれて誠実に正しく生きて行かうとする心の姿勢がさりげなくうつされてゐて、それが、しだいに僕の気持をほぐし、酒のめぐりを一層心地よいものにしてゐました。

実兄のお子さんを養女に迎へられたといふオカツバ頭の里子ちゃん、隅の方で温和しく本を読んでゐました。

「里子、柳井さんは、教科書を作つてゐなざるんやで、お前の教科書を持ってきてみ」

その教科書の仕事も、田舎からまるで迷ひ出たやうな恰好で出てきて、師友にたすけ、はげまされながら、つくねんとぼくは没頭してゐたのでした。

あかあかと、安治川の向ふに沈む夕陽をながめながら、郷里にの

年来の無沙汰のお詫びを申しあげ、近況をのべたりしてゐるうちに、さっそく酒の用意ができて、奥さんも同席され、数年振りの談に、冬の陽の驟るのも忘れてゐました。

「この頃は、朝が早いものですから、ひまさへあれば寝ますのよ」

恵昭院はにこにこ、奥さんの言葉に笑つておいででした。病院でのお仕事は、患者の給食品の仕入れたとのことでした。

「わるい奴がゐるよましてな、患者の食料費をびんはねしよりましたんや。院長に言つてそんなことをさせんように、ぼく頑張つてゐますんや。わるい奴がゐりますわ」

また暗いうちから、寒風の中を自転車で通勤される、氏のお気持がわかる様な気がしました。転交する社会の犠牲者たち。浮沈のげしかった時代の底の痛ましい犠牲者たちを、誰がふり返り、いたはり慰めようとしたでせうか。ぼくの身辺にも、その痛ましい犠牲者はゐりました。ぼく自身でさへ、家人もぼくもそれを思つて慄然とした佐びしい暗澹とした日々があつたのでした。

こした幼いものたちの上を痛いほど思ひ、皮革加工の異様な匂ひに流離のなげきを嘔む日々の愁ひをしばらく忘れて、しだいにぼくは酒の酔に身を任せてゐました。それから、詩集を取り出して氏に献じたのでした。氏も奥さんも、わがことの様に喜んで下さいました。

「よかつたですなあ。祖国でいつも読んでましたんや」

ここ数年のぼくの沈黙のすべては、そこに歌はれてゐた筈である。やうやく酔の廻つた氏は、しばらくそれをめくつて居られたが、

「萩原さんが生きてゐはつたらなあ」

と、二度ばかり叫ぶやうな調子で咳かれました。その咳きには限りない慰撫と励ましがありました。

氏はまた、父君逝去のことを語られ。その日は、生駒嶺にかかった虹が、たとへやうもなく美しかったと、その呻くやうな咏嘆がぼくの胸をばげしくゆさぶりました。

氏が、この数年、云ひがたい世に屈し、一人に堪へてこられた深いなげきの一端を、ぼくは聴いたやうに思ひました。

暗いところから、湧きあがる時世時節の波が、山のごとく漲りあふれて、あくまで真摯な氏の精神の上に、よせかけては引き、またおもむろに盛りあがつたことと氏の、つひにあらはにされることになつたそれらのだひとつりに堪へてこられた日目を、いまもひそかに思つてみます。

「我が歳きはまりて、安養浄土に還帰すといふとも、和歌の浦曲の片男波の、よせかけよせかけ帰らんに同じ」

あまり確かな伝承ではありませんが、これは弘長二年十一月、親鸞九十歳、「臨末御書」といふものの一節でした。(未完)